



神戸常盤大学

キャンパスレポート

2021.12
No.64

建学の精神

広く学術の基礎となる知識及び技能を授けるとともに、深く専門の学問及び技術を研究・教授して、知的、道徳的に優れた技術者を育成し、また成果を社会に還元することにより、国家及び地域社会の発展に寄与すること。

www.kobe-tokiwa.ac.jp/univ/

コロナ後に向けて



学長 濱田 道夫

この「キャンパスレポート」の巻頭言を書くにあたり、過去の文面を思い起こすと、やはりコロナ禍が始まってからはコロナを中心としたテーマばかりでした。このところ、全国各地で感染者数も減少し、第5波はほぼ落ち着いたかに見えます。それでも今後、年末年始に向けて油断できない状況は続きそうです。もうそろそろ新型コロナウイルスに振りまわされない生活に戻りたいところではありますが。

コロナ禍のなかでキャンパスライフは大きく変わりました。何といても遠隔授業の導入です。当初は緊急避難的に行われましたが、いまでは学生も教員もだいぶ慣れてきています。少人数や実技・実習をともなう専門科目などでは対面授業を続けてきたので問題はないのですが、遠隔授業となると、どうしても学生と教員、また学生どうしのコミュニケーションが希薄になってしまいます。教育の本来の姿が遠のいていくようです。

しかし、コロナ禍のなかで教育のデジタル化がこれまで以上に推奨され、また実際にそれを体験したわけですから、コロナが去ってしまえば遠隔授業もそれで終わりということにはなりません。遠隔授業のほうが学習効果や教育効果があがると判断された科目を選び、それをコロナ以後に繋いでいくのが順当なやり方かと思っています。いずれにせよ、

対面授業の臨場感がなくても、教員も学生も緊張感を持って授業に臨みたいものです。

コロナ以後とはいっても、もっと広い視野に立って今後の本学の姿を描くことも必要です。とりわけ、長年積みあげてきた地域活動が重要になります。本学と地域が一体となる秋の「ふれあい健康フェスタ」は、密を避けるため残念ながら2年連続で中止を余儀なくされましたが、今後再開するにあたっては、地域の人びとの要望などに耳を傾けながらコロナ後の地域健康のあり方を考えていきたいと思っています。(ちなみに、この4月からは地域健康の新たな取り組みとしてキャンパス内に「すくらボ」〈健康生活研究所〉を開設しています)また、地域の子育てを支援する「子育て総合支援施設KIT」は、この間、従来通りのあるいはそれ以上のにぎわいを見せています。こうした経験も踏まえ、来年4月には短期大学部口腔保健学科の4年制大学化にともない、地域の人びとや保護者、学生、教職員などを対象とした「歯科診療センター」を開設する予定です。

コロナ禍の行く末はまだ見えてきませんが、こうした活動をとおして大学と地域の人びとがともに元気になることを期待しています。

全教職員が一体となって臨んだ職域接種

実施時期	1回目：7月13日～15日・19日 2回目：8月12日・17日～19日・23日
対 象	本学学生、教職員・その家族、地域関係者1,600名
実施従事者	受付・事後処理・問診・接種・薬剤管理・経過観察・救急：本学教職員（一部外部応援）
ワクチン	武田／モデルナ社製ワクチン

この夏、安心安全な学修生活を目指し、建学の精神に基づく良き市民の責務として、全教職員が一体となってワクチンの職域接種に取り組みました。その結果本学の全体接種率は9割となり、地域集団免疫の向上に大きく寄与することができました。心配された異物混入は、ロット番号が異なっており、さらに薬剤監査を徹底し、混入は一切ありませんでした。

理事長の激励あいさつにより始まった接種当日、看護師及び研修を受けた歯科医師、臨床検査技師がワクチン接種の打ち手を行いました。学生は学科学年ごとに接種を受け、地域関係者等も対象とし、多言語対応や託児サービスも行いました。

懸念された副反応は、緊張によるものが多く、呼吸困難などの症状が悪化する増悪もありませんでした。2回目は医療機関接種を勧奨するなどにより、救急事例は発生しませんでした。

7月14日は、雷雨による停電で会場が暗転しましたが短時間で

で復帰し、ワクチンに影響もなく、スタッフの声かけで、大事には至りませんでした。

全ての業務にわたり、教職員が一体となり、組織力が発揮されました。特筆すべきは柔らかな言葉遣いと待たせない導線案内、速やかな処理と観察時の声かけ等々、あらゆる局面でのホスピタリティー精神です。それが来場者の安心につながり、円滑な運営ができました。

学生は、教職員の新たな一面を見たことと思います。職域接種は貴重な資質向上の研修でもありました。組織力と教職員の力の総和(シグマ/Σ)による「TOKIWAΣモデル」といえるでしょう。

	学科	7月	8月	他接種含む
接種率	医療検査学科	86.4%	85.6%	94.1%
	看護学科	91.9%	80.8%	88.8%
	診療放射線学科	79.9%	78.1%	92.9%
	こども教育学科	75.9%	75.9%	90.4%
	口腔保健学科	76.8%	76.8%	87.3%
	計	80.5%	79.8%	90.7%
接種人数	接種月	学生	地域等	計
	7月	1,170人	428人	計1,598人
	8月	1,161人	433人	計1,594人

*8月の接種人数・接種率の減は、医療上の理由で接種できなかったため。



受付の様子



ワクチン吸引作業



キッズスペース(託児の様子)



接種の様子

ノエビアスタジアム神戸にてキッズスペースを運営しています

本学は今年度より、神戸市兵庫区のノエビアスタジアム神戸にて子育て広場「ときわんノエスタ」、学びの広場「てらこやノエスタ」を開設致しました。そして今年6月、当該施設が新型コロナウイルスワクチンの大規模接種会場になると同時に、神戸市からの委託を受けワクチン接種者のお子様の一時預かりを行うキッズスペースを運営することとなりました。

このキッズスペースは、ワクチン接種年代が子育て世代に移行していくことに伴い、お子様と同伴でも安心して接種に訪れることのできる環境が必要となることから神戸市内の大規模接種会場に設置されました。本学が運営するノエビアスタジアム神戸内でのキッズスペースにおいては、特に夏休み

期間中は1週間の利用者が150名を超えるなど、多くの方の役に立つことが出来たと考えます。また、運営スタッフ等につきましては本学の卒業生や在籍生をはじめとする多くの方々にご協力いただきましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。



ノエビアスタジアム神戸入口



キッズスペース

ノエスタ託児スタッフとして



こども教育学科4年 藤本 佳菜

私はノエビアスタジアム神戸でワクチン接種を受けられる方のお子様を、一時預かりするスタッフとして活動しました。

コロナ禍で接種会場まで子どもを連れて行くという不安や、接種中に子どもを待たせてしまうという不安を託児スペースがあることで解消できます。接種後は多くの方に「本当に助か

りました」「ありがとう」という感謝の言葉を掛けていただき、スタッフとして役に立っているという実感がわきました。お子様の中には、接種される保護者の方と別れるのが嫌で泣く子もいます。しかしスタッフが一緒に遊んだり言葉掛けをしたりすることによって徐々に笑顔で遊ぶようになり、お迎えに来られた保護者の方もその様子を見て安心されています。

この経験を生かして、今後は子ども達の笑顔を大切に、保護者にも安心して頂けるような保育者になりたいです。

学生インタビュー「学生国際シンポジウムに参加しました」

令和3年10月16日に韓国で開催された学生国際シンポジウム(The 59th Congress of KAMT & International Conference 2021)に参加された医療検査学科1年和田陽さんにインタビューしました。

和田さんは、全国多数の応募者からStudent international symposiumへ日本代表の大学生として1名選抜され発表を行いました。

Q1. 国際シンポジウム参加のきっかけを教えてください

A1. 私はもともと国際交流や学生参加できる学会に興味がありました。シンポジウムのタイトルは「コロナ禍における非対面教育」でした。英語に自信はありませんが、オンラインでハードルが低かったことが参加を後押ししました。

Q2. 準備はたいへんでしたか

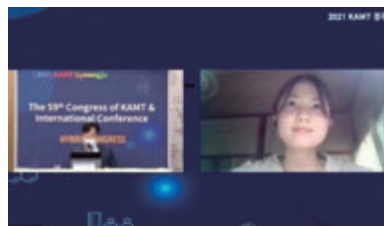
A2. 伝えたい英文が作れず悩みました。発音、抑揚など気を付けながら何度も録り直し苦労が多かったのですが、山崎先生からご指導いただき完成しました。私は自身の経験に加え、My dreamsとして臨床検査技師の夢を含めました。今を改めて考える良い機会になりました。

Q3. 発表の感想はいかがでしたか

A3. 他の参加者が母国語でない英語で流暢に答える姿に衝撃を覚えました。私も堂々と英語で発表し、話し合えるようになりたいと強く思いました。海外の人と話し合い、自分の価値観を広げるのは楽しそうです。

Q4. 今回の参加で得られたものはありますか

A4. 私と同じような人が世界にいることを肌で感じました。広い視野を持って物事を考えるきっかけになりました。私は1回生なので、早い段階で経験をすることができ本当に良かったです。卒業するまでにまた学会参加のチャンスがあればぜひ挑戦したいと思います。



質疑応答時の様子



参加証明書が届きました

実習体験記

看護活動基礎実習を終えて



看護学科 1年
木田 光咲

私は、看護師が患者さんとどのようにコミュニケーションを取っているかを観察することを目標に実習に挑みました。その中で、最も印象に残ったのは、点滴のルートに嫌がっている患者さんに対する看護師の対応でした。看護師は、ルートの必要性を患者さんが分かる言葉で、具体的に説明していました。その結果、患者さんは納得し、表情も柔らかくなりました。この体験から、看護師は専門的な知識を伝える際、患者さんが理解できる言葉で語りかけることが重要なんだと気付かされました。より良い看護を提供するために、専門的な知識や技術は必ず必要です。しかし、患者さんが持っている力を最大限に発揮するためには、コミュニケーションを通して、患者さんの表情、言動からニーズを汲み取ることが重要だと学びました。この実習で学んだことを活かし、患者さんの心に寄り添える看護師を目指して頑張りたいと思います。

基礎看護学実習を終えて



看護学科 2年
本庄 彩乃

私は、実習でCさんを受け持ちました。Cさんは左足をギプスで固定して生活していましたが、受け持ち時にはギプスが外れ、歩行器を使用してトイレに行けるまでに回復していました。しかし、トイレ以外は臥床して過ごしていました。私はCさんの清潔のセルフケア不足を補うために、清拭を行うことにしました。ふらつきや筋力低下があるCさんへの清拭は、当初、安全を優先し臥床して行う方法が最善だと考えました。しかし指導教員から「CさんのADLの拡大や自立へ向かうという目標に合っていないのでは？」という指摘を受け「ハッ」としました。その後、Cさんにシャワー室で手すりを持ちながら立位をとってもらう方法に計画を修正し実施しました。するとCさんは安定した立位をとりながら手の届く範囲を自分で拭き、「気持ちよかった」と言ってくださいました。私は、援助方法の工夫によってCさんが、自分の力を発揮する姿を見て、とても嬉しく思いました。また、同時に看護の持つ力を強く感じました。ADLの拡大状況に合わせて安全と自立を両立させた援助が提供できたと思います。この実習での学びを活かして私の目指す看護師像に少しでも近づけるように学修に励んでいきたいです。

保育実習を終えて



子ども教育学科 3年
方山 萌々花

今回、私は初めて10日間という長い期間での保育実習を経験しました。大学の授業では学ぶことのできない、新たな学びや発見が毎日たくさんあり、とても充実した10日間を過ごすことができました。大学の授業でこれまで身に付けてきた知識を、初めて実践できる場所が今回の保育実習であり、自分の知識がどれだけ現場で通用するのか、不安や心配を抱えながら実習に挑みました。実際に子どもたちの前に立ち保育をする中で、言葉がけ一つとっても、何が正解なのか分からず戸惑う私に、現場の先生は、「最初からできる人なんていないよ」と、優しく声を掛けて下さいました。その言葉のおかげで私は思い切って自分らしくやってみようと思うことができました。これからも、何事も恐れずに挑戦してみようと思います。保育実習を経て、保育士になりたいという気持ちがより大きく、明確なものになりました。今回学んだことを大きな糧とし、これからも学び続けたいと思います。

小学校実習を終えて



子ども教育学科 3年
大西 京香

「学校についてどんなイメージがありますか？」実習初日、教頭先生の講話で聞かれた言葉です。それに対して「ブラックなイメージがあります。」私は素直にそう答えました。すると、「確かにブラックな部分もあります。ただ、それを上回るほどのやりがいがあります。この4週間、自分の目で見て感じて、少しでもブラックからホワイトに変わったらいいな。」と教頭先生はおっしゃいました。教育実習を終えた今、ブラックな部分があっても尚、この道に進まれた先生方の気持ちが分かりました。残業も多く本来の仕事である教材研究や授業の準備にすべての時間を費やせない、そんな先生の仕事ですが、たくさんの魅力が詰まっていることを知りました。わずか4週間の限られた時間でも子ども達の成長を実感することができました。長年子どもに寄り添っていらっしゃる先生方は、教え子の成長する姿をとても嬉しく幸せな気持ちで見守っていらっしゃるのではないかと思います。また、たくさんの先生がおっしゃっていた、「教師が頑張れば頑張るほど子どもから返ってくる」という言葉も身を持って体験しました。どんなに多忙でも子どものために、学校のために日々奮闘する先生方はとてもカッコよく、輝いていました。教育実習を体験しなければ決して分からなかったことです。「現場を見たからこそ分かる先生の素晴らしさを！」

臨地実習を終えて



口腔保健学科 3年
山本 陽菜

臨地実習では、学校の講義では分からなかったことが、実際に見学したり経験したりすることで理解できるようになりました。毎日の実習日誌や自己学修は思っていたよりも大変ではありましたが、自分がどんどん知識を修得していることを実感できて実習が楽しく感じられました。患者さんと接することや診療の補助など、コロナ禍でできないこともたくさんありましたが、その分実習先の歯科衛生士さんがひとつひとつ丁寧に教えてくださったおかげで充実した実習の日々を送ることができました。また、帰学日には先生方が相談に乗ってくださったり、共にごがんばる友達がたくさん励ましてくれました。その周りの方々の支えがあったからこそ最後まで取り組むことができました。自らの成長を感じたとともに、知識の足りなさも実感した約1年の臨地実習でした。この臨地実習で学んだことを卒業後に活かすため、残りの学生生活で足りない知識を補えるよう、今まで以上に勉強に励みたいと思います。

前期を振り返って



医療検査学科 4年
小出 優希

私はコロナ禍の細胞検査士養成課程で、細心の感染対策を行いながら900時間の学修カリキュラムを学んでいます。この間「緊急事態宣言」が発令され、遠隔授業やオンデマンド配信が行われましたが、対面授業以上に自分のペースで学修できた点で良かったと思います。細胞診の勉強は文字だけでは記憶に残らないので、細胞像の写真、図やグラフ等を使って付箋ノートを作り覚えやすい工夫をしました。間違いを本で調べたり、友人や先生に聞いたりし理解を深めていきました。解らないことが解るようになった時の面白さが毎日あり、それを友人と共有できる環境で勉強できる楽しさを感じています。コロナ禍は私にとって、自由が制限された状態で、自分に何ができるか考え実行する力が試されているように思います。勉強しなければならぬ環境にいるからこそ、今すべきことを考え効率良く学ぶ方法を考える良い機会となっております。引き続き頑張って乗り切りたいと思います。



診療放射線学科 1年
竹本 瑞樹

コロナ禍で、大半の大学がオンライン授業であると聞きますが、神戸常盤大学では入学当初から対面授業が盛んに行われており、専門的な内容を学ぶことが多いので、難しい内容も分かりやすく学べました。コロナ対策もしっかりされており、安心して学修に取り組むことができました。まなぶる ▶ときわびとなどの他学科と合同の授業もあり、チーム医療を目指す上でとても良い交流ができました。また、夏休みには先生に勧められ、福島での研修に参加しました。大阪大学を初めとする様々な大学の方と、実際に福島の土壌を採取し、放射能を測定したり、帰宅困難区域を視察したりと、とても貴重な体験ができました。特に、福島について議論した時、色々な考えに触れることができ、福島のために行動しようとサークルが作られたり、充実した研修となりました。後期からは、国試で必要な科目も増え、実習も始まるので、医療を学ぶ学生として自覚をもって頑張りたいと思います。



看護学科通信制課程 1年
中西 友紀

入学早々、新型コロナウイルス蔓延によりスクーリングはリモートになり、先生、同期の方々との接点を持つこともできず、入学式以降は孤独な学修が続きました。慣れないレポート作成と試験に追われ、その評価に心が折れることもありました。レポートの再提出は当たり前と理解しつつも、どう表現すればよいか悩み、一喜一憂し、今日まであつという間の日々でした。私は看護師資格を取るなら、神戸常盤大学短期大学部に進学しようと決めていました。看護師は大学教育が普通となってきています。今後はますますその傾向が強まっていくと考え、全国の通信制で唯一の短大である本校の大学教育に必要性を感じました。通信制課程の学修は基本的に独学であり、ともすれば後回しにしようとする自分との闘いです。時には学修が進まないこともありますが、また前に進もうと思えるのは、レポートの先生からの励ましのコメントであり、「頑張ろう」と支えてくれる入学式で幸運にも出会った学友であり、理解してくれる家族のおかげです。これからも学修、そして実習も続いていきますが、周囲の支援への感謝を忘れず頑張りたいと思います。

KOBE TOKIWA オープンキャンパス 2021

学生と教職員が一丸となり、コロナ禍の中で全6回の予約制オープンキャンパスを実施いたしました。マスクの着用や手指消毒・換気等を徹底し、ソーシャルディスタンスを保ちながら、来場者の皆さまに本学を体感していただきました。



総合受付



4号館での看護学科の総合説明会



2号館での医療検査学科の総合説明会



体験学習



1号館での教育学部の総合説明会

福島県飯舘村研修(令和3年8月21日～8月26日) 体験記

診療放射線学科 教授 高久 圭二



未来を担う若者に、放射線と福島を正しく理解する機会を届けたいというコンセプトで行なわれた福島県飯舘村研修に組織委員として参加しました。

本研修には本学診療放射線学科の学生が3名参加しました。参加者の専攻は多岐にわたり、11大学(本学、大阪、東北、和歌山、兵庫、奈良教育、岡山、早稲田、熊本、明治、岐阜)から85名が参加しました。事前講義を7/3, 10, 17に開催(本学は事後にビデオ視聴)しました。



土壌の深さによる放射線濃度を調べるために、サンプルを加工中の竹本さん

村内各地での土壌の放射線量測定サンプリング、帰宅困難地域訪問に加えて、今後どのように地域づくりをしていくかなど、講義、学生同士の討論などを通して学んでもらいました。土や植物のサンプリングの実習と平行して、社会がどうあるべきか等の活発な議論を「私たちにできること」というテーマで約10人の班ごとに毎晩行ってもらいました。

本学学生は、miniゼミで放射線に関する偏見の学習や放射線の計測もしていたため、積極的に議論に参加できました。その結果を8/27に大阪大学で発表・議論してもらいました。その後、このテーマを実際にやるための学生サークルが学生自らの発案で発足しました。研修直前に本学では新型コロナのPCR検査をしていただき、感謝しております。



サンプルの放射線濃度を計測中の小西さん

SD研修会

SD委員会 委員長
こども教育学科 教授 山下 敦子



「チーム医療」「チーム学校」というキーワードが飛び交う昨年、大学教育でどのような力を身に付けるべきかという問いかけに関わる研修会が開催されました。

令和3年9月7日、SD委員会第四回研修会(FD)として、神戸大学名誉教授、加古川中央市民病院 医療監の石川雄一先生のご講演をいただきました。テーマは「新しいチーム医療(IPW:

Interprofessional Work)の教育と実践」です。

チーム医療の必要性とこれからの大学教育に求められるものについて、具体的な例を挙げてお話しいただきました。医療人に必要な五つの力量として「患者中心のケアができる」「多職種のチームで働く」「根拠に基づく医療を提供できる」「質の向上に努める」「情報科学を利用できる」点を挙げられました。この五つの資質・能力の基礎は、大学教育の全ての科目で培うべきものです。

いのちを支える人材育成が本学の教育理念です。そのために保健科学部と教育学部の「他職種」であり「多職種」でもある教育環境をより有効活用し、充実した教育を行っていく必要性を一層強く感じた研修会でした。



石川雄一氏



研修会の様子

上田國寛先生を偲ぶ

去る9月5日、前学長の上田國寛先生が2年に亘る闘病を終えてお亡くなりになりました。

先生を本学にお迎えしたのは平成18年、本学が短大から四年制への移行の準備を始めていた年でした。

先生はそれまで京都大学一筋の碩学であられました。四年制大学に向けての私学の運営等諸問題とは無縁の方であろうかと思っておりましたが大学設置に関する審議・ヒアリングに対していささかも動じることなく自身の教育哲学をもって対応される姿に感銘したものでした。

そして教職員に対して初代学長のお言葉は「本学は『小粒であってもどこかピリリとした大学でありたい。』輝いたところのある大学でありたい。」というものでありました。その後度々口にされたのは「大学は教育の場であるとともに研究の場である。」ということでした。ともすれば、短大時代を曳きずっていた教員に鞭を入れられていたのです。そして自らノーベル賞を視野に入れた熱い思いで研究に向きあっておられました。

一方、学生達に対しては自作の詩「若者よ」にあるとおり、いつもやさしい眼差しと励ましで接しておられました。



上田國寛先生

「若者よ」

そら
天に星々ある如く
世界は夢に満ちている
若者よ
いま
現代の世界に目を開き
己が使命に目覚めたら
君の力で精一杯
そら
天に向って夢を射よ
夢が明日を呼んでいる

そしてお元気な頃は学生達の輪の中に入り、お得意のテニスやソフトボールに興じておられました。

また趣味として巷間あまり知られていない十七文字の文芸ジャンルである「冠句」を嗜んでおられました。一流の科学者にとって不可欠の発想や美的感覚を養っておられたのではないかと思います。

先生の言動をふり返ってみる時、あらゆる場面で畏敬の念を強くします。そしてそれ等のことが本学に根づいていくことを御遺志と思ひ大切にしていきたいと思ひます。

学校法人玉田学園 理事長 旭 次郎



学生とディスカッションされる上田先生



学長室でのゼミ風景

診療放射線学科 特任教授 谷口 英明



今年度も恒例の明泉時・富士荘貴住職による「坐禅体験」で始まり、第4回は公開講座として、芸能分野から女優の三船美佳さんにお越しいただきました。私とはサンテレビの情報番組「午後キュン」などで共演していたため、快く引き受けてくださり「私の女優論～Smile～」と題してトークショー形式で行いました。講義では、あのトレードマーク“笑顔”を見ていただきたいので、万全の感染対策のなか、あえてマスクを外してお話しいただきました。

三船美佳さんといえば、父は大スター“世界の三船敏郎さん”です。撮影の休憩時、いつも侍姿で家にいる父を見て育った美佳さんは「父の仕事はお侍」と思っていたそうです。そんな偉大な父の

影響もあって芸能の世界に飛び込んだのは必然だったのでしょうか。

しかし、芸能界は甘い世界ではなく、私生活でも順風満帆とはいかず辛いことも多かったようです。いつも天真爛漫なイメージの美佳さんですが、基本的にネガティブ思考だったそうで、「自分を責めず、自分を好きになる、周りとのご縁に感謝する」という“ヨガのアヒムサ”という考えを学び、どんな時にも笑顔を大切にしているということです。最後には柳沢慎吾さんをゲストに迎えた「午後キュン」の一部を視聴し大爆笑。

美佳さんの、人の心に寄り添って、いつも笑顔で話を聴ける素晴らしいコミュニケーション力に共感させられた方も多かったのではないのでしょうか。



三船美佳氏



講義の様子



サンテレビ情報番組「午後キュン」より



ときわ幼稚園通信



穏やかな秋晴れの日、幼稚園の年長・年中児で西代蓮池公園へ出かけました。大学の坂道を下る際には、「鳥や虫の音が聞こえる」「クモの巣のまん中に大きなカラフルなクモがいるよ」など見つけたことや気付いたことを友達と話したり、「車が来たよ」と教師が声をかけると「端っこ寄ろう」と子ども同士で安全に進めるように声をかけあったりしていました。

公園では、体操をしたり、異年齢でかかわりながら『だるまさんがころんだ』やうずまきの道を進んで出会った所でじゃんけんする『うずまきジャンケン』をしたりと、広い公園で体をのびのび動かして遊びました。また、虫探しやどんぐり拾いなどの自然探索もしてさわやかな風を感じながら遊ぶことを楽しみました。

これからも幼稚園内外の自然に触れる中で、季節の移り変わりを五感で感じ子ども達の心身の成長が育んでいければと思います。

ときわ幼稚園 教諭
古閑 美絵



うずまきジャンケン

財務情報につきましては、本学園のホームページをご覧ください。

発行・編集 神戸常盤大学 広報委員会 〒653-0838 神戸市長田区大谷町2-6-2 ☎(078)611-1821(代)